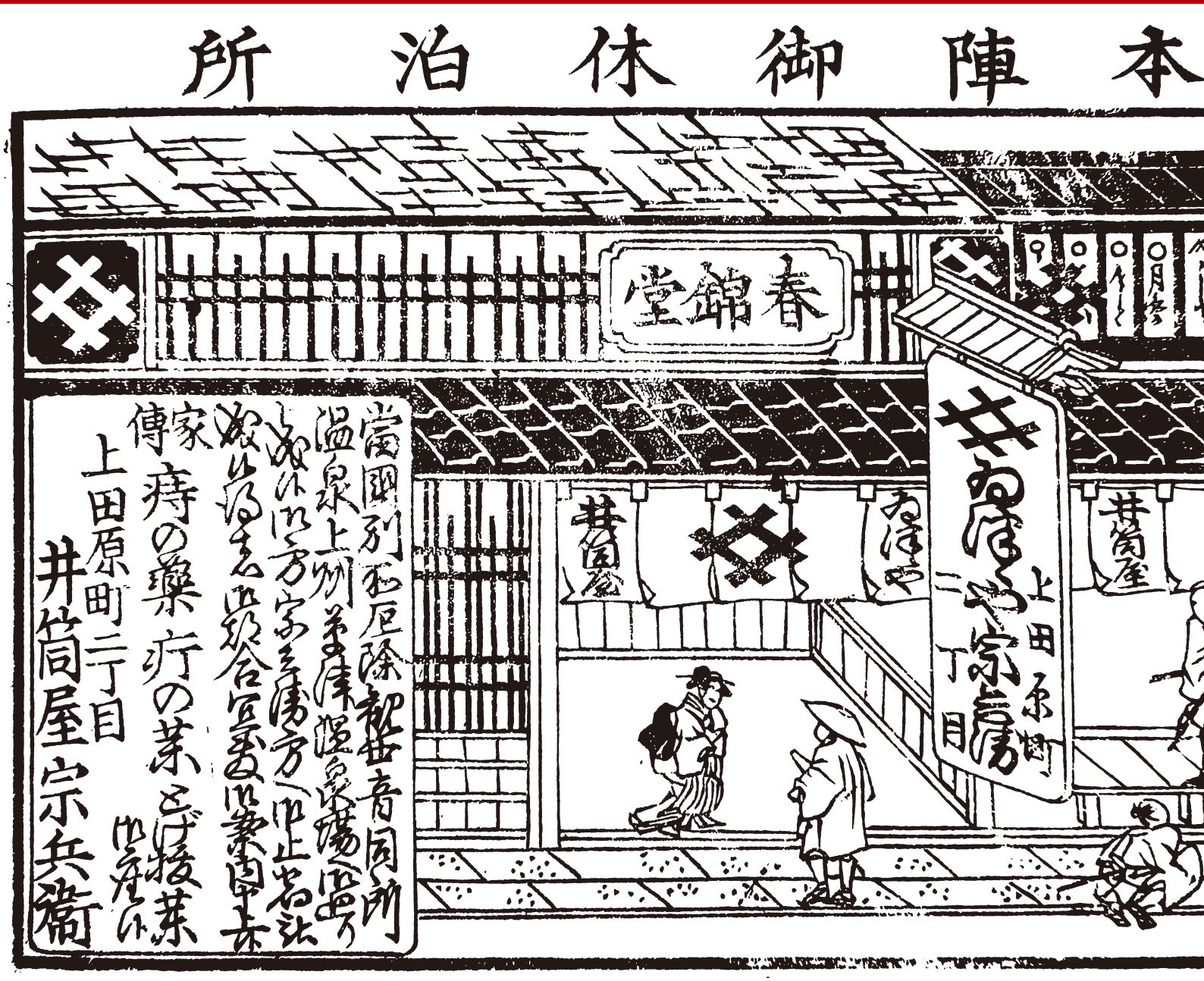
サロントーク in 真田丸の世界 第３回

2015.3.21

関ヶ原合戦の後、昌幸の家臣団は信之がそのまま引き継いだと言われてきたが、真田家を離れた者、浪人した者、百姓に戻った者、原町や海野町で町人になった者もあった。



ゲスト：寺島隆史さん

（元上田市立博物館館長・上田女子短期大学非常勤講師）

ファシリテーター：宮下　明彦

（NPO 法人上田図書館倶楽部）

会場：上田情報ライブラリー
ことばの繭ホール・ブックカフェつつじ

上田の玄関口、上田情報ライブラリー

上田情報ライブラリーは上田駅前にあるパレオというビルの4階にあります。市民の「暮らしや仕事に役立つ」図書館を目指し、実用的セミナーを開催しているほか、「千曲川地域の文化の創造と発信」も視野に入れた各種の講座、及び文化イベントを、市民団体（NPO法人他）や地元の大学とも協働しながら数多く開催しています。

ゲストは元上田市立博物館館長・上田女子短期大学非常勤講師の寺島隆史さん。

サロントークのタイトルは、

「関ケ原の戦いと昌幸家臣団のその後」

ようこそ、「サロントークin真田丸の世界」へ

平成28年のNHK大河ドラマ「真田丸」放映に向けて、これからも市民サイドから益々盛り上げていきたいということで、上田市の「わがまち魅力アップ応援事業」として、NPO法人上田図書館倶楽部が主催し、上田情報ライブラリーと共催、上田ケーブルビジョンのご協力のもと、「サロントークin真田丸の世界」を開催いたしました。

上田市はじめ、「真田丸」ゆかりの地は大河ドラマのご当地ということで、これから大変多くの観光客が訪れますが、これを機会に我々市民が真田氏のこと、地域のことについて、改めて学び直し、また誇りを持って、遠方より訪れるお客様に上田の歴史や文化、郷土の良さを伝えたい。また、子供や孫にもそのことを伝えていくことが大事だ。そんな思いでこの「サロントークin真田丸の世界」を企画しました。

NPO法人上田図書館倶楽部の紹介

私たちは、上田情報ライブラリーを拠点として、図書館との協働による情報サービス活動、学習活動、文化活動や、図書館業務、関連業務の受託により〝市民参加による幅広い図書館サービス〟を実現して、市民生活の向上と地域の文化の発展に役立ちたいと、活動を続けています。

ご一緒に活動してくださる市民の皆様のご参加をお待ちしています。

一、関ヶ原の戦い前

昌幸・信幸の上田・沼田分立と家臣団

寺島さん（以下敬称略）：関ヶ原の戦いにおいて、真田昌幸と信繁は西軍に、信幸は東軍にと敵味方に分かれたが、そこに至る前段として、沼田領を真田氏が自分の領土としたところからみていきたい。

・天正8年（一五八〇）、武田勝頼の命により真田昌幸、沼田城を攻略。武田氏の家臣としてではあるが、昌幸の権限の及ぶ地域、上野国北部の吾妻・利根の両郡一帯となる。

・天正10年（一五八二）、武田・織田両氏滅亡に伴う周辺三強豪（上杉・北条・徳川）による旧武田領取り合いの大争乱であった壬午の乱が起こる。

・壬午の乱の徳川・北条の講和条件の一つが、真田氏支配下の上野沼田（吾妻を含む）を北条氏に引渡す（北条勢力の強かった佐久郡ほかは徳川に引渡す）というものだった。この沼田領の件は、後々まで問題が尾を引くことになる。

・天正11年（一五八三）4月、上田築城開始。昌幸が家康に申し入れて、上杉方に対する徳川方の最前線の重用基地として、家康の命令で築城工事開始と考えられる。

寺島：家康の命令を裏付けるものとして、上田城普請を督励した伊那の下條氏宛書状が二通遺されている。下條氏は伊那における家康配下の最も有力な武士であった。その頃、家康は甲府へ出てきていた。昌幸の要請を受けた形で、佐久小県の敵対する相手を討つ目的だった。

・同年7月には昌幸の重臣で沼田城代の矢沢綱頼、北条氏から沼田城に派遣された、沼田城引渡しを求める使者を斬る。（真田氏、実質的に家康と手切れ）

・それ以降、同13年までの真田氏は、上杉よりの姿勢ながら独立の形。

・その間、天正12年に昌幸は、室賀氏当主正武を滅ぼす。家康から真田を殺すよう命じられていた室賀を返り討ちにした形。

寺島：室賀正武の子孫に残された系図に、正武は家康から命を受けて真田の殺害を図ったが、失敗して殺されたと書かれている。

・天正13年（一五八五）になり、沼田を北条方に引渡すようにとの徳川の改めての指示を拒否して、いよいよ徳川軍の攻撃を受けそうになってから、昌幸は上杉景勝の救援を要請して正式に上杉に従属。

・天正13年閏8月、真田対徳川の第一次上田合戦起こる。その直後に上杉勢により「伊勢崎城」（後、上田城と改称）増強普請。

・天正14年（一五八五）、家康、真田再征の軍を起こす。秀吉もそれを承認し、上杉景勝に対しても真田を助けないよう指令。しかし、景勝による秀吉への強い働きかけにより、家康の真田再征は中止に。

上田城主真田昌幸・沼田城主真田信幸

寺島：さて、家康が秀吉に臣従し、次は北条氏ということになったが、北条氏は沼田問題決着を出仕の条件とした。昌幸は聞かざるを得ないと判断、天正16年、矢沢頼綱を沼田から呼び戻し、替わって長男信幸を沼田城へ入れた。

・天正17年（一五八九）、秀吉の裁定により沼田城と沼田領の三分の二が北条氏に引渡される。その分の替地は信幸が、伊那郡で家康より給される。

・同年11月、真田方に残された名胡桃城を北条勢が奪い取る。この裁定違反を怒った秀吉、北条氏討伐を決定。

・天正18年（一五九〇）、小田原合戦。北条氏滅亡し秀吉による全国統一達成。

○沼田領は真田氏に返還され、小県・吾妻・利根三郡にわたる真田領確定。

○これ以降、信幸が沼田城主として、上田領（小県）とは独立した形で吾妻・利根両郡を支配。

沼田への一部重臣の移住

・矢沢頼幸、大熊靭負、木村渡右衛門ほか、昌幸の主要家臣の一部が、昌幸の命によってであ

ろうが、信幸の側近として、その治政補佐のために沼田へ派遣された。

・矢沢の場合は信州の知行を半分返上して、代りは上州で支給、が分かっている。

寺島：**表1**は昌幸と信幸が発行した文書の奉書（主君の命を承って奉じて出す家臣の名前）である。信幸文書の大熊、木村、出浦については、昌幸が召し抱えた家臣であった。

表1　昌幸、信幸発給文書の奉者
（担当奉行）
天正18年～慶長5年

昌幸文書の担当者（上田）
池田甚次郎（後、長門守）
石井喜左衛門
河野清右衛門
赤羽次平
宮坂八右衛門

信幸文書の担当者（沼田）
大熊靱負
木村渡右衛門・五兵衛（後、土佐守）
出浦上総介（後、対馬守）
北能登守

二、関ヶ原の戦い

寺島：関ヶ原の戦いは、家康方と石田三成方の合戦というわけだが、少し前までは豊臣方と徳川方の合戦などとされていた。家康は、あくまで豊臣家の一の家来という立場であった。

秀吉の死と家康の上杉討伐

・豊臣秀吉、慶長3年（一五九八）8月、伏見城で没す。この後、徳川家康は秀吉の遺言を無視して権力強化にはげみ、秀吉の子秀頼の重臣という形ながら、政務を独裁的にみるようになる。

・そして、前田利家の跡を継いだ利長を屈服させたのに続いて、会津に移されていた上杉景勝が豊臣家への謀反を企てているとして、慶長5年（一六〇〇）に会津征討の軍を起こす。

・真田昌幸も、豊臣家の宰相としての立場の家康の命令を受けて、会津へと出陣。

真田父子東西両陣営に分かれる

・家康が会津へ向けて大坂城を発った後、石田三成らが毛利輝元を総大将に担ぎ出して、反徳川の兵をあげた。こちらを西軍、家康方を東軍と呼ぶ。

・西軍からの決起を知らせる7月17日付の檄文が、会津征討途上、下野（栃木県）にいた真田昌幸の下に21日には届き、真田父子三人の協議が犬伏（佐野市）で行われた。

・その結果、昌幸と信繁は西軍に付こうとして、その21日夜には上田城へ引き返すべく、犬伏の陣を引払っている。一方信幸は東軍に加わることになる。

東西に分かれた理由

・信幸の妻小松殿は家康の重臣本多忠勝の娘だった。また、秀吉没後の信幸の徳川への接近はあからさまでもあった。一方、信繁は西軍の中心人物のひとり大谷吉継の娘を妻としていた。

・右のような姻戚関係のほか、昌幸としては戦火を交えてさえいる家康に対する不信感は強いものがあったか。

・また、この決断は上杉景勝征討途上でなされた、という点を忘れてはならないのでは。

・昌幸は第一次上田合戦の前後に、上杉景勝から受けた支援に対する恩義の思いも強かったのでは、とみられる。にもかかわらず、景勝が豊臣政権に対して反逆を企てている、という言いがかりをつけての征討軍に心ならずも従っていたのだった。

・そこへの知らせであったこともあり、即座に西軍加担を決意したのではなかったか。

・打算で東西に分かれたなどとも言われる。この点は、結果として家の存続につながるのなら父子引き分かれもよいか、といった程度のことだったのでは。

徳川秀忠軍の上田城攻め（第二次上田合戦）　戦後処分

・西軍の敗北に終わった関ヶ原合戦の結果、昌幸・信繁の命はなかったはずのところ、東軍についた信幸の助命嘆願により、父子は高野山へ流罪となる。

寺島：上田城が破却された後、信幸は上田領を受け継ぎ、現在の上田高校の場所に屋敷を設けた。一方、沼田城はそのままだったので、上田と重臣を分けて支配するようになる。

三、信之（信幸）の上田領相続と家臣団

寺島：さて、昌幸の家臣団はどうなったか。昌幸の家臣は大部分を信之が引き継いだと言われてきたが、あらためて信之に召し抱えられ、配属替えされた者がいた反面、これを機に真田家を去って浪人になった者も少なからずあったようだ。

・東軍についた信之（信幸）は、以前からの沼田領にあわせ、父昌幸領だった上田領（＝小県郡）も支配することになる。

・慶長6年（一六〇一）前半に徳川方の在番の手で上田城の破却が行なわれ、その上で上田領が信之に引渡されたか。

・信之は慶長6年8月に上田領の家臣や寺社に宛て、一斉に次のような知行宛行状・同安堵状や寄進状を発給。

飯嶋市丞宛真田信之判物

以上

別して奉公致すべきの由に候条、本知行百貫文異儀無く出し置き候。向後いよいよ功を励むに於いては、一所宛行うべく候。以上。

辛丑

八月五日　信之（花押）

飯嶋市丞殿

宮坂八右衛門宛真田信之判物

以上

向後奉公致すべき由に候条、本知行五拾貫文出し置き候。猶戦功に依り加増せしむべき者也、

辛丑

八月五日　信之（花押）

宮坂八右衛門殿

矢沢忠兵衛頼幸宛真田信之判物

以上

小県郡今度改め申し付け候間、其の方本領五百貫文異儀無く出し置き申し候。年来別して奉公候間、重ねて一所申し付くべく候。いよいよ奉公を抽んでらるべき者也。

辛丑

八月五日　信之（花押）

矢沢忠兵衛殿

寺島：これらは、その書き出しの文言によりこの史料のとおり三通りに分けることができる。飯嶋と宮坂は昌幸の旧家臣だったため、「別して」または「向後」奉公するのでという形。矢沢はそのまま引き続いて信之の家臣であるため事務的に「小県は今度改めるので」としている。

（資料2ページを参照）

・沼田の士であった恩田伊賀守が真田昌幸に臣従したのは天正10年6月の、織田信長滅亡直後のことだったが、同年6月の恩田宛昌幸知行判物の書出しは「向後忠勤を励まるべき旨に候の間…」とあり、次の10月発給のものでは「別して忠節有るべきの由に候間…」とある。

・信之が小県を領するようになったのは、親が隠居した跡を継いだというものではなかった。上田城攻防戦では、昌幸の旧臣は徳川勢と戦ったわけでもあり、当然ながら一応のけじめが必要でもあったろう。そのような事情の中で、天正18年以降、信幸が沼田城主になって上田を離れてからの昌幸の召抱え家臣に付いては、「向後」と、新規召抱えの形をとったものではないか。

・右の小県（上田領）の家臣への知行給付・安堵と同時に、寄親・同心の大幅な編成替えが行なわれた。その状況について判明する分は**表3**のとおり。

表3　真田信之による慶長6年の同心の配属替えとその知行地

昌幸時代（配属替え前）		信之時代（配属替え後）		
寄親	同心	寄親	同心	同心知行地（貫高）…判明分のみ
原半兵衛	鑓の者34人	原半兵衛（知行高550貫）	鑓の者50人	
羽中田	鑓の者7人			
青木半左衛門	鑓の者9人			
白倉武介	鑓の者25人（16人）	矢沢忠兵衛（知行高500貫）	鑓の者40人	西松本2人（8貫ずつ）？
	（9人）			
小山田壱岐守	鑓の者24人	小山田壱岐守（知行高323貫）	鑓の者40人	西松本14人（1人3貫―4貫400文） 東上田3人（8貫ずつ）
平林対馬	鑓の者7人			
日置五右衛門	鑓の者40人（24人）	大熊五郎左衛門（知行高311貫）	鑓の者40人	洗馬曲尾32人（8貫1人 5貫31人）
	（16人）			
	鑓の者24人			
池田甚次郎（長門守）	鉄砲の者18人（10人）	川原右京助（河原）	鉄砲の者30人	洗馬曲尾8人（8貫ずつ） 東上田1人（8貫）
	（8人）			
川原右京助（河原）	鉄砲の者12人			
千勝	鉄砲の者7人			
石井喜左衛門	鉄砲の者1人	飯島市之丞（知行高100貫）	鉄砲の者20人	
春原六左衛門	鉄砲の者12人			

・同心の配属替えについては、何れも慶長6年（1601）8月7日付けの真田信之朱印状（『信濃史料』収録）による。・寄親の知行高も、やはり慶長6年8月5日付けの真田信之判物・朱印状（『信濃史料』収録）による。

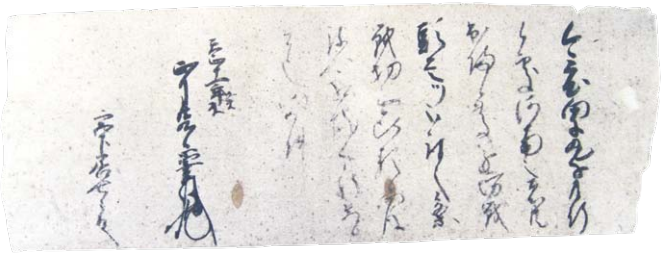
・関ヶ原合戦（第二次上田合戦）後、昌幸の家臣は大部分を信之が引き継いだと言われてきたが、実際にはこれを機に真田家を去ったものが少なからずあったとみられる。

・表3の左欄の人物は昌幸の主要家臣の一部だが、この12名のうち、信之の家臣になるのをいさぎよしとしなかったのか、家臣となったのは半分以下である。

四、上田の商人となった家臣たち

上田城下町の商人になった宮下氏

（資料8ページを参照）



宮下善七郎宛真田昌幸感状（上田市立博物館蔵）

さて、この真田昌幸感状は、天保14年（一八四三）編纂の『真田家御事蹟稿』に収録されており、ここでは「小県郡上田海野町宮下五郎右衛門所蔵」とある。本文書は江戸時代には上田の町人宮下氏所蔵。つまり、真田昌幸の家臣であった宮下善七郎の子孫は上田町の商人になっていたのだった。宮下氏宛ての真田昌幸朱印状は、このほかにも天正13年の状と慶長元年（一五九六）の役請取状があり、この二通は宮下太兵衛宛てとなっている。（現在は三通ともに上田市立博物館に保管されている）

宮下氏の家譜によれば、善七郎と太兵衛は父子であるとも同一人であるともいうが、太兵衛は「昌幸公改易の後漂白」とも「戦場に於て蹇病身に成る」ともある。慶長5年の上田籠城戦で脚を負傷して身障者になったらしく、それもあって真田家を辞したものらしい。太兵衛自身かその子の代かは、はっきりしないが、上田に戻って海野町で米穀商になったとも見える。昌幸文書を三通も伝えた一方で、信之のものはない点よりみても、宮下太兵衛が上田合戦後、浪人したことは確かと言ってよい。

遠州屋久左衛門所蔵の神尾文書

（資料3ページを参照）

これら神尾氏宛て武田信玄朱印状等七通の古文書ともう一通計八通を所蔵していた上田城下原町の遠州屋久左衛門は、宛て先である神尾氏の子孫であったとみてよい。

永禄九年（一五六六）神尾惣左衛門尉宛武田信玄宛行状により、遠州の本貫地を離れた惣左衛門は、武田氏の家臣となり、染屋（現上田市）の地の居屋敷と、その近辺の所領を宛行われたものとみられる。

元亀3年（一五七二）の神尾宗大夫宛武田信玄安堵状をみると、宗大夫は信玄より「遠州内本領」を安堵（保証・確認）されている。これより、神尾氏は遠江国（静岡県）出身と分かるが、神尾文書の所蔵者久左衛門の家の屋号も「遠州屋」であり、先祖の出身地を屋号としていたものとみられる。

真田昌幸に臣属した神尾氏

上田市立博物館には、神尾淡路守宛真田昌幸朱印状一通と、同信之の朱印状および黒印状各一通ずつ、寄託されている。これら真田文書は、神尾氏旧蔵の文書の一部であり、三通のうち、特に真田信之朱印状は上田宿形成に関わる貴重な文書である。

（資料5ページを参照）

慶長11年（一六〇六）10月の真田信之朱印状は、上田城下の海野町の七人と原町の三人の者が家を能く作ったので、以後客用の宿所を申し付けることにする、というものである。

この文書に特定の宛名はないが、神尾淡路守宛真田昌幸朱印状とセットで原本が見出されたことからみても、やはり神尾氏旧蔵文書の一つとみて誤りなく、神尾氏が当時の上田宿に関わる主要な職務にあったことを窺わせる。

このように、神尾氏は真田家の松代移封後も、遠州屋という

屋号の町屋として上田城下町に残ったものとみられる。これらの点からみて、神尾氏は関ヶ原の合戦後に転身し、上田宿形成当初の問屋になった、と考えて間違いないのではなかろうか。

参加者との交流

【1】昌幸と幸村を高野山に流したのは何故か。現代人の我々の感覚だと、同じ関西に置いておくのは危ないんではないかと思ってしまうのですが。

寺島：高野山に流すということは、修行し、蟄居していろと、私の感覚だと島流しと同じだと思うのです。それに、家来もわずかですし、大阪城に入るなどということは考えられない、大丈夫だろうと、全く問題にしてはいなかったのでは。

【2】真田というと忍び・草の者のイメージがありますが、実在したという痕跡はないのでしょうか。庶民の私たちから見るとロマンがあるので、先生の専門外かもしれませんが、分かる範囲でお話しいただければと思います。

寺島：確かなことは分からないが、それに近い人がいたということはあったでしょうね。真田領は広範囲だったので、連絡するには普通の家来が行ったのでは用をなさない。修験者（山伏）とみられる人が連絡をとっていたということもあったようですが、忍びの存在が分かる確かな資料はないですね。あればおもしろいと思いますが（笑）。

【3】何かの資料で、望月六郎といういわゆる十勇士と同じ名前の人がいたという記録を見た気がするのですが。

寺島：真田十勇士のもとになる人はいろいろな物語にでてきますが、大正時代に出た立川文庫で一躍有名になったのですね。望月という家臣は松代藩士にはいたが、上田で仕えていたという記録はないですね。望月という名字は北佐久の望月にちなむものですが、山梨県に大変多い苗字です。

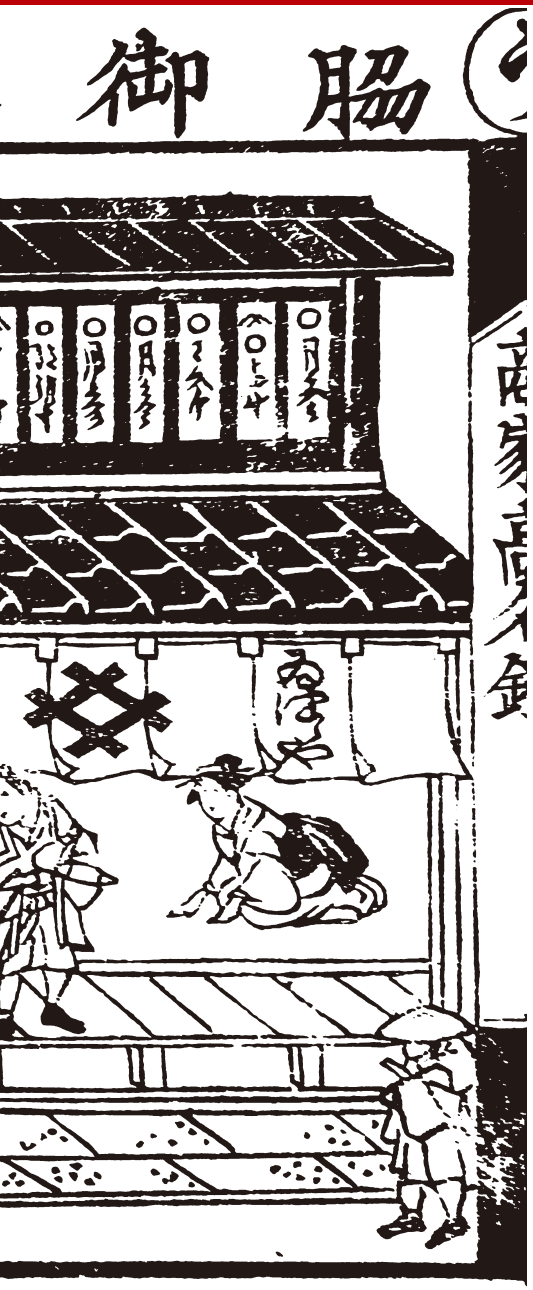
【4】今日のテーマは、昌幸家臣団はその後どうなったかということですが、私の伯父は、「うちの先祖は殿様と一緒に真田から上田へ下りて来たが、関が原で負けたので武士から百姓に戻った」と何の証拠もありませんが話していました。殿様とは昌幸侯のことなんですが、皆さんの中にも、先祖が関が原で負けたのでまた百姓に戻ったとか、町人になったとか聞いておられる方はいますか。

【5】ある古文書を整理していたら、高野山に配流された家臣が16名いたという史料を見つけてコピーしてありますが、先生のお話ではあやしいとのことですね。

寺島：基になっているのは多分、先程ご覧になった「房州様高野御入御供之衆」だと思いますが、これはどうも確かなものではないようです。ただ、このうちの何人かは随行していて、その人たちは自ら進んで流罪になった、そのくらいのつもりではなかったかと思われます。

【6】昌幸・信繁が九度山に行ったとき、家臣は何名くらいついて行ったんですか。

寺島：はっきりしたことは分からないが、せいぜい10人位ではないでしょうか。先程の16人の中では、池田、高梨、窪田、川野、青木、三井、青柳くらいですかね。それからまた、先程ご覧いただいた慶長6年真田信之安堵状の飯嶋市丞も、昌幸の主要家臣のひとりです。市丞の子孫は松代について行くわけですが、寛永7年に「四十八騎浪人」という、主要家臣のうち48名がいっせいに脱藩するという事件が起こって、そのうちのひとりとして元の知行地へ戻ってきてしまいます。その子孫は現在も丸子にお住まいです。同じく、小林右近宛というのがありますが、昌幸の家来であったけれどそのままやめてしまったのか、子孫は長和町にお住まいです。



諸国道中商人鑑

江戸時代後期、中山道から善光寺道の宿々にあった諸商家の有様を記した案内書。信濃国上田分では掲載料を払った43軒が載っている。これらの商家の中には、関ヶ原合戦後、町人になったその子孫が営むものもあったといわれる。

ようこそ、「ブックカフェつつじ」へ

「つつじ」は上田駅の正面にある駅前ビルパレオ４階の上田情報ライブラリー「ことばの繭ホール」にて営業しています。

メニューは挽きたてのコーヒー、烏龍茶、紅茶、ジュース、それにトースト。トーストと飲み物のセットも好評です。

運営しているのはＮＰＯ法人上田図書館倶楽部。図書館の中にある喫茶店は全国でもめずらしいそうです。

この冊子を手にとった皆さんも、上田駅を降りたら、まず、情報ライブラリーで真田に関する情報を、そして、つつじで美味しいコーヒーを味わってみませんか。スタッフ一同、おもてなしの精神でお待ちしております。

リーフレット内の資料について

今回のサロントークの中で資料の内容は上田情報ライブラリー「ことばの繭ホール」にある「ブックカフェつつじ」にて閲覧できます（サロントークで使われた資料のコピー）。閲覧を希望される方はスタッフへお声をお掛けください。

また、図書館倶楽部ホームページ「サロントーク in 真田丸の世界」に上田情報ライブラリー、上田市立博物館のリンクリストを用意しました。ご活用ください。

平成26年度 わがまち魅力アップ応援事業
サロントーク in 真田丸の世界　第３回
発行：ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部
共催：上田情報ライブラリー
協力：上田ケーブルビジョン